国語の窓　第１６９号　2023.1.16

実用的な文章における双方向型指導法

相手意識・目的意識と双方向型指導法

「書くこと」で重視するのは、相手や目的に応じて効果的な文章を書くことのできる能力の育成です。授業においては、誰に対して、どのような目的のもとに書くのか、ということを十分に意識させなければなりません。

したがって、年に一、二度、行事や身辺の出来事を感想中心に書かせる作文指導、読書や見学などの経験を形式的にまとめさせる作文指導には、大きな問題があると言わざるを得ません。また、生徒のことを、文章を書こうとしない者にしているとしたら、知的好奇心を喚起するような学習活動や効果的な書く活動を組織し得なかった指導に問題があったと考えるべきでしょう。

まずは、新鮮な書くことの面白さに気づかせ、主体的な活動を成立させる指導法の開発に取り組まなければなりません。ここでは、双方向型の指導法の中から、手紙と説明に関わる実践を提案していきます。

実用的な文章としての「手紙」

相手意識をもって手紙や案内文を書くことは、人と人との関わりを学ぶ大切な機会の一つとなります。心のこもった手紙を書くとき、相手の立場を思いやる意識が育つでしょう。要を得た案内文を書く学習は、社会において実用的に役立つ言語能力を育てることにつながります。

同じ内容を伝える文章でも、相手によって表現の仕方が変わる場合があります。異なる相手、異なる目的を想定して文章を書くことで、相手意識・目的意識を育てる授業ができるのではないでしょうか。

手紙や通信文を書く学習のねらいは、「書くこと」の領域を中心に、自分の考えをもち、または、自分の考えをもてるように、目的や場面などに応じて適切に表現する能力を育成することです。手紙や通信文を書く学習では、書式や様式を模倣したり、一方的に発信したりするのではなく、相手や目的、場面に応じて、自分の思いや考え、用件などを双方向的に通じ合ったり、両者の課題を解決したりできるような伝え合う力を育成することが肝要です。

手紙や通信文を書く学習でも、他の言語活動でも、伝え合う力を育成するためには、次のような５つの言語意識を学習者の側から具体的に取り上げる必要があります。

① 自分にとって、手紙や通信文を書くための相手意識
② 自分にとって、手紙や通信文を書くための目的意識
③ 自分にとって、手紙や通信文を書くための用件や条件、状況意識
④ 自分にとって意図的・計画的に手紙や通信文を書いたり、手紙や通信文から相手の意図や要点を的確に受け止めたりするための方法や技能意識
⑤ 自分にとって、手紙や通信文が意図的・計画的な表現行為や理解行為になっているか等を自己評価・相互評価する評価意識

手紙や通信文を書く学習は、ややもすると、形式的な書式や様式の模倣になる傾向がありました。これからは、学習者の５つの言語意識を拠点に、相手や目的、場面に応じて、自分の思いや考えなどを双方向的に通じ合ったり、両者の課題を解決したり、用件や条件に応じて情報を収集・選択・活用したりするような学習を組織するべきです。

その学習の過程で、従来の書式や様式を参考にしながら、相手や目的、場面に応じて必要な書式や様式を工夫したりすることが大切です。その際、学習者の側に立って、具体的な相手や目的、場面を用意する必要があります。